

# 江戸時代の荻野と荻野山中藩陣屋焼き討ち事件

東海大学教育開発研究センター教授 馬場 弘臣

## はじめに

東海大学教育開発研究センターの馬場と申します。教育開発研究センターは、教授法の開発や、授業評価などについて研究する部署です。文科省が推進している**アクティブ・ラーニング**なども5～6年前から取り組んでいます。文科省は、きっと、ハーバード大学の教授で、哲学者のマイケル・サンデルさんの白熱教室みたいなものを想定しているかも知れませんが、すでに講義型授業ではIT器材を使ってもさまざまな限界があることがデータ的にも証明されてきています。歴史学にとっての究極の**アクティブ・ラーニング**は、卒業論文なのですが、いずれにしましても、基礎的な知識が充実していないと**アクティブ**に授業を構築することは難しいです。その点は歴史学も同じです。歴史はよく暗記科目と言われますが、学問としては、史料の読み方から理解の仕方に関する**トレーニング**から始まって、そうした個々の史料を論理的に組み上げて構成していく力を養うこととなります。科学的な思考の前提として、**ファクトベース**、証拠や根拠を明らかにすることと、**ロジカルシンキング**、論理的に考察を組み上げていくことが必要と言われますが、これを歴史学では、**実証妥当性**、**論理整合性**と呼んでいます。例えば、織田信長が本能寺の変で明智光秀の謀反によって自害に追い込まれたことは有名な史実で、これに関して豊臣秀吉や徳川家康などの黒幕説や陰謀説がさかんに唱えられたりします。ですが、実際のところ、それを裏づける史料もなければ、論理的にも成り立たなくて、今は光秀の単独犯行説が通説になっています。それが確定できれば定説で、それ以外はすべて仮説に過ぎないのですね、だから、もう一つ**クリティカルシンキング**、つまりすべてのことを疑ってかかるということも大事な要素になってきます。

とは言いながら、歴史という学問は、好き嫌いがはっきりしてしまっていて、それこそ基礎的な知識がないと聞いていてもさっぱりという体験を授業でも痛いほどしています。教科書というのはそれこそ基礎的な知識の固まりで、定説と通説から成り立っていますが、歴史という大河のほんの一筋の流れしか示していません。時間の流れという縦系と事象と事象の間にある因果関係という横系が複雑に絡み合っているのが歴史であって、それを解きほぐしていくことが何よりおもしろくて、それこそ醍醐味です。だから、論文を書くという作業は、そうしたさまざまな要素の結晶なのです。

今日はそんな歴史的な見方の一端をお話できればと思います。偉そうなことを申しましたが、私自身は、いわゆる地域史を専門にしております。神奈川県内でも市町村史の編纂事業に長らくかかわってきましたので、スライドにありますように、小田原市史や南足柄市史、真鶴町史・大井町史では小田原藩の藩政や藩政の改革、村落史といったものを中心にやってきました。これに対して、大磯町史では交通史や幕末維新の特に東海道の問題、寒川町史では相模川水系の治水や用水、朝鮮通信使や渡船場の問題などを含む交通史、横須賀では海防史、幕末史といったように、それぞれの場所でさまざまなテーマを見つけて研究してきました。こうした地域の歴史、最近では**ローカルヒストリー**などと呼ばれたりしますが、そうしたローカルヒストリーを全体史の中にどう位置づけていくかが大きな課題となります。そういった意味では、幕末維新时期は、個別の地域の歴史がこの時期の政局の動きにダイレクトにかかわっていることが多くて、ある意味やりやすいとも言えます。

本日は、そうした中で、慶応3年(1867)に起きた荻野山中藩陣屋の焼き討ち事件という、幕末維新史を彩る歴史的な事件を中心にお話をしたいと思います。これは荻野地区のローカルヒストリーを考えていく上で、絶対に欠かせない事件です。ただ、今回は小中連携研修会の一環だと伺いましたので、その前提として、江戸時代とはどんな時代か？ 江戸時代の荻野地区にはどんな特徴があったのか？ 藩とは何か？ 荻野山中藩にはどんな特徴があったのか？といった基本的な知識をお話しした上で、荻野山中藩陣屋の焼

き討ち事件についてお話ししたいと思います。その方が、事件についてより深く理解できると思いますし、なぜ、荻野山中藩の陣屋が焼き討ちにあったのかという問題について、それこそ歴史的な糸をほぐしていければと思っている次第です。

## ・江戸時代とは？－江戸時代にはどんなイメージを持っていますか？－

江戸時代とは、慶長8年(1603)に徳川家康が征夷大将軍に任じられて以降、慶応3年(1867)15代徳川慶喜が大政奉還するまでの265年間、もしくは慶長5年(1600)の関ヶ原の戦以降明治元年(1868)の王政復古までの269年間をいいます。この間中央権力である幕府が江戸に置かれたことにより江戸時代とよばれ、また幕府を掌握した徳川氏にちなんで徳川時代とも称されます。将軍と大名の主従関係を軸に幕府と藩による武家政治を基本とする一方、禁中並公家諸法度や寺院法度によって朝廷・公家・寺社に統制を加えました。このような江戸時代の社会体制の基本は、武士を支配身分とし百姓・町人を被支配身分とする身分制社会でした。

経済面では江戸・大坂・京都の三都を中核とした全国市場が形成され、活発な商業活動がみられました。こうした動きと対応して西廻り・東廻りなどの海運や、五街道などの陸上交通網も大きく発達しました。外交面では、当初は積極的な善隣外交を推進したが、キリシタン禁制と貿易・海外情報の独占、金銀流失の回避などを意図した鎖国政策が、安政元年(1854)に開国するまで続けられました。また、文化面では、上方中心の元禄文化、江戸中心の化政文化が都市を中心に開花しました。(『岩波日本史辞典』に加筆修正)

徳川幕藩体制 狭義には(江戸)幕府と藩(大名)とを軸にした政治体制をいい、広義には幕府一藩を中心に全人民を支配する政治社会体制をいう

従来の江戸時代のイメージ 貧しい農村・重い年貢、鎖国の時代 文化的発展・社会的発展

図1. 歴代将軍と幕府政治の展開(P.1) 一般的な江戸時代の政治史の流れを将軍ごとにまとめる

終わった時代 = 確立 安定 動揺 解体の「ライフサイクル」

### 変わる江戸時代像

- ・260年余に至る「平和」「泰平」の時代 武家 = 軍事政権でありながら、基本的に「戦闘」を排除。
- ・中世的な武士が戦闘のプロフェッショナルであったのに対し、「殺生を忌避する武士」へ 中世では庶民も同様 庶民の殺害権が基本的に禁じられた社会 自力救済<sup>じりききゆうさい</sup>の排除
- ・17世紀から19世紀半ばまで「平和」が続く社会は、世界的に見ても珍しい 中国 明から清へ交代、アメリカ 独立戦争・南北戦争、ヨーロッパ ナポレオン戦争、英仏植民地戦争etc.
- ・戦国時代までは中国や朝鮮からの輸入に頼っていた生糸、木綿、茶、陶磁器どの産物を自給できるようになる時代 鎖国による国内産業の発展
- ・戦国時代には銀の生産量は世界一 金銀銅の産出国 = 黄金の国「ジパング」
- ・庶民にいたるまで高い識字率 読み書き算盤 中期以降約3,000万人の人口の1割が武士、8割が百姓、1割が町人その他 全体の識字率は幕末で50%。江戸近郊では70~80%か？  
ではなぜ短期間で崩壊したか？ 嘉永6年(1853)のペリー来航から14年で大政奉還

## ・荻野郷と上・中・下荻野村

### －1. 江戸時代の村と近代の市町村

次に江戸時代の地方行政について見ていきましょう。現在の自治体は、都道府県という広域自治体と市町村という基礎自治体の2重構造になっていますが、江戸時代は、基本的に本州・四国・九州とそれぞれに付随する島を60余りの「国(州)」に分け、さらに「郡」－「村」と続き、この「村」が行政体としては

\*1 自己の権利が侵害されたときに司法手続によらず自己の力で侵害を排除すること。じりよくきゆうさいともよむ。実力行使に対する国家権力の統制が弱い中世社会においては、事実として実力行使が重要な意味を持ったが、近世社会では基本的に否定された。

最小単位でした。これを「**国郡村**」制と呼びます。また、江戸時代の「**町**」は三都や城下町などの都市部、あるいは宿場町・湊町などの人口集積地内における内部の地域区分—共同体組織のことでした。「江戸は八百八町」と言われていますね。たまたに古文書に「**厚木町**」と書かれていることがありますが、これはあくまでも俗称で、江戸幕府が公認した称は「**厚木村**」です。

荻野地区は、江戸時代はそれぞれ「**相模国愛甲郡上荻野村・中荻野村・下荻野村**」に分かれていました。それ以前、中世には「**庄・郷・保・村**」などと称して一定していません。「**庄**」は多くの場合「**荘園**」を示していて、厚木市の大部分は、「**毛利庄**」という荘園に含まれていました。荘園が最終的に解体するのは、豊臣秀吉による太閤検地以降です。

それでは、図2から図5と表1および図6・図7をもとに溯って見ていきましょう。

図2．厚木市15地区区割り図(P.1)

図3．区割り図の原型(P.1) 地区

図4．明治期、厚木の町村—1か町7か村(P.2) 地区の原型

図5．江戸時代、厚木の村々—41か村(P.2)

こうして見ていきますと、現在の厚木市は、江戸時代の村が合併をくり返して誕生し、今は市の拡大によって細分化されていることが分かるかと思えます。なぜそうなったか、これを示したのが表1と図6です。

表1．江戸時代の村と近代の市町村(P.2)

図6．戦後の市町村合併(P.2)

表1(P.2)によれば、江戸時代には6万から7万の「**村**」があったことが分かります。明治21年(1888)でも7万余ですから、廃藩置県があっても郡—村は残っていたわけです。これを一新するのが、同年に公布された「**市制町村制**」で、翌明治22年に施行されて「**市町村**」制へと移行します。これは江戸時代の村の範囲では100軒以下の小規模村町が7割を占めていて、戸籍や税の徴収などの業務に支障が出るためと、義務教育としての小学校の設置・管理を進めるためでした。だいたい300軒から500軒を目安に「**村町**」の合併を進めたと言われていて、その結果が明治22年の合計1万5,859か市町村になる訳です。この統計では残念ながら町の数が分かりません。

いずれにしても、ここで現在の厚木市域には、厚木町と図4にある7つの村が成立しました。なお、上荻野村・中荻野村・下荻野村の3か村は合併して荻野村になります。これを明治の大合併と呼んでいます。明治の大合併では、江戸時代の「**村**」は、近代的な市町村に対して「**自然村落**」とされ、市町村の下で「**大字(小字)**」もしくは「**部落**」と呼ばれました。

アジア・太平洋戦争後は、昭和21年(1946)に新憲法が公布され、翌22年に地方自治法が公布されて新しい地方制度が制定されます。ここでは市町村の役割強化がはかられますが、これは6・3・3・4の新学制に沿って中学校を設置・管理することと、消防や社会福祉などを担わせるためでした。中学校の設置については人口規模約8,000人を基準として市町村の合併が進められました。そして昭和28年(1953)には「**町村合併法**」が、同31年(1956)には「**新市町村建設促進法**」が制定されます。市町村合併促進の基本計画は町村の数を3分の1にすることで、高度経済成長による都市化の進展も相まって合併が進んでいきます。これが昭和の大合併です。図6に明らかなように、この昭和の大合併では、1万あった市町村が、3,400まで減少しています。3分の1ですね。厚木市の誕生は、昭和30年(1955)のことでした。

図7．厚木市、合併の経緯(P.2)

図7(P.2)はこれらの経緯をまとめたものです。明治の大合併と昭和の大合併で厚木市が誕生する過程が理解していただけるかと思えます。1つお断りしておきます。実は睦合村が誕生したのは昭和21年(1946)のことで、それれまでは三田村他5か村組合などと呼ばれていました。「**組合町村**」と呼ばれる形で、現在の厚木市と愛川町のような関係といえよるしいでしょうか。

こうした経緯を経て、厚木市は昭和30年(1955)2月1日に誕生しますが、旧大住郡に含まれていた江戸時代の上岡田村他5か村は、明治の大合併で中郡相川村となっていて、厚木市には7月6日に編入されます。これよりさらに遅れて翌昭和31年(1956)9月30日、最後に荻野村が厚木市に編入されます。

## ー2. 荻野郷と上荻野村・中荻野村・下荻野村

それでは表2(p.3)で江戸時代の上荻野村・中荻野村・下荻野村の特徴について見ていきましょう。その前に、「荻野」という地名が史料的に確認できるのは、現在のところ、観応3年(1352)6月13日付の足利尊氏の禁制<sup>1</sup>がもっとも古いと言われています。室町時代のはじめには地名が確認できるわけです。これには「覚園寺領相模国毛利庄内妻田・散田(三田)・荻野郷事」とあって「荻野郷」という地名が確認でき、他に妻田郷と三田郷が確認できます。覚園寺は鎌倉にある寺院で、荻野郷は、覚園寺領であったことが分かります。なお、毛利庄内には当時、足利尊氏の領地もありました。また、戦国時代、小田原北条氏が治めていた時代は、荻野郷には4・9の六斎市<sup>2</sup>が開かれていたこと、宿<sup>3</sup>の機能を持っていたことが確認されています。この荻野郷が、慶長8年(1603)の検地を経て、まず上荻野村と下荻野村に分かれ、その後17世紀の半ばには、さらに下荻野村から中荻野村が分村することになったと言います。こうして江戸時代の上荻野村・中荻野村・下荻野村が誕生するのです。つまり「荻野」は、中世では「荻野郷」と言い、近世ではそれぞれ「相模国上荻野村・中荻野村・下荻野村」に分かれ、明治の大合併では「神奈川県愛甲郡荻野村」とまた一つの「荻野」になって、昭和の大合併では「荻野地区」になるという経過をたどったこととなります。ちょっと珍しいですね。

江戸時代の「村」を確認する際にはまず、その村の「石高」－「村高」と領主を確認します。石高は、耕地の生産力を米の生産高に換算した江戸時代に固有の評価基準です。領主については次章で詳しく見ていきます。

さて、表2によれば、江戸時代中期以降、上荻野村が1,049石余、中荻野村が648石余、下荻野村が610石余となっています。江戸時代の1村の平均は400石程度で、相模国もだいたいそれくらいですから、どの村も平均より大きく、とくに上荻野村の大きさが目を引きます。残念ながら上荻野村は田畑の反別(面積)が分かりませんが、中荻野村と下荻野村の反別をみる限り、田方が少なく、畑が多い村であったことが分かります。産業を見ると、木材や木炭を産出していたことが分かりますので、村としては畑の面積が大きい「畑勝ちの村」で、山稼ぎに頼っていたということが言えるかと思えます。これが第1の特徴です。

そこで興味深いのは、中荻野村と下荻野村では入会<sup>4</sup>の御炭山<sup>4</sup>から産出された木炭を、それぞれ中荻野村が123俵、下荻野村が69俵江戸城に献上することで諸役免除<sup>5</sup>となっています。これは、徳川家康が関東に入る際に、三河国(愛知県)から家康に付き従ってきた又左衛門・三郎左衛門・市右衛門に中荻野村・下荻野村に角田村・田代村・三増村の3か村に茶の湯用の炭を焼いて献上するように命じ、5か村で毎年600俵を上納することで諸役免除となったと言います<sup>6</sup>。これが第2の特徴です。

こうした山稼ぎにはどうしても人手が必要になります。各村の戸数を見ると、19世紀の半ばで上荻野村が362軒、中荻野村が180軒、下荻野村が165軒となっています。先ほど述べましたように、江戸時代の村は100軒以下が7割を占めていたと言いますから、いずれも平均以上の村と言えますが、特に上荻野村の352軒は突出しています。当時の世帯は1軒は平均で4人程度でしたから、単純計算でも1,400人程の人口になります。江戸時代では1,000人は1か村としては人口が多い村なのですね。

最後にこの3か村は、甲州道に沿って集落が広がっているわけですが、下荻野村は、この甲州道の人馬の継立場に指定されています。継立場は、東海道などの五街道の宿駅にあたるもので、幕府の役人などが通行する際に、輸送のための人馬を提供することが義務づけられた村です。五街道の宿駅に対して、甲州

\*1 ある行為を禁止することを命じた法令。

\*2 毎月4日、9日、14日、19日、24日、29日の6回市を開催すること。

\*3 宿(しゆく)は宿駅のこと、輸送のための人馬を提供する郷であったことを示す。

\*4 一定地域の住民が一定の山林原野などを共同で使用収益すること。肥料あるいは飼料用の草や、生活資材の薪炭材、家作木などを採取した。

\*5 米などの生産物を上納する年貢に対して、諸役は主に労役を提供することをいう。宿駅に人馬を提供する助郷役などが典型であるが、この場合の諸役免除は朝鮮通信使の通行や将軍の日光社参などのような特別の諸役の免除理由となっているようである。

\*6 『相中留恩記略』愛甲郡 御炭山の項

道などの脇往還には継立場が設定されていたのでした。下荻野村は、下りは厚木村から中荻野村の間を継立て、上りは中荻野村から妻田村もしくは厚木村まで継立てることになっていました。

## ・荻野山中藩

ここでは藩とは何か、大名とは何かという話から入りましょう。その前にもう1度表2(P.3)をご覧ください。寛永10年(1633)と元禄10年(1697)は、中荻野村も下荻野村も幕府領になっていますが、上荻野村はそれぞれ寛永10年が旗本松田氏・小栗氏・石谷氏、元禄10年が幕府領と旗本の石谷氏・小栗氏が領主となっています。ここで領地をもらう領主とは何かと言えば、武家では大名と旗本がそれにあたります。大名と旗本の違いは、領地の石高で、1万石以上の領地を將軍(幕府)から拝領しているのが大名で、1万石未満の領地を拝領し、なおかつ將軍への御目見<sup>おのめみえ</sup>が叶うのが旗本です<sup>1</sup>。大名は自分の領地のうちに拠点を構えて藩を運営しますが、旗本は基本的に江戸に住んでいて、これを定府<sup>じょうふ</sup>と言います。この他にも領主としては、天皇に公家、寺院や神社なども領地の大きなものは領主のようなものです。將軍家の菩提寺である芝の増上寺や上野の寛永寺は1万石以上の領地を拝領していますので、まさに大名並みです。これらに対しては旗本は1万石未満で、400石程度の旗本も大勢います。そうすると1村全部ではなくて、部分的に拝領することもあります。複数の領主がいる村を「相給<sup>あいぎゆう</sup>」<sup>2</sup>と言い、1人の領主ならば1給、2人ならば2給と数えます。上荻野村は、寛永10年も元禄10年も3給の村ということになります。

ところが、享保13年(1728)に上荻野村は下野国烏山藩大久保氏の飛地領<sup>とびちりょう</sup>となり、中荻野村と下荻野村は駿河国松長藩大久保氏の飛地領<sup>とびちりょう</sup>となっています。松長藩は、天明3年(1783)に中荻野村に陣屋を建設しますので、ここから荻野山中藩となります。基本的に領主の居所のあるところの地名で藩の名前を呼びます。

「藩」<sup>まがき</sup>とは本来、籬や守りなどを意味し、中国周代の天子が諸国に諸侯を配したものが藩屏<sup>はんぺい</sup>・藩翰<sup>はんかん</sup>と呼ばれ、この政治制度のことを封建制と言いました。江戸時代には、儒学者などがこれに習って「藩」という使ったりしていますが、一般的に使用されていたわけではありません。藩という呼称は、明治元年(1868)に明治新政府が、旧幕府領に府と県を設置したのに際して、旧大名領を「藩」と呼ぶのが一般化したのでした。ここでは、家臣を軍事と行財政の組織し、領地に対する徴税権や処罰権をもって独自に運営する大名の経営体全体を藩と呼ぶことにしましょう。

表3(P.4)は、文政13年(1830)段階での藩を石高別にまとめたものです<sup>2</sup>。俗に「三百諸侯<sup>さんびやくしよこう</sup>」<sup>3</sup>と言われている、諸侯は大名のことですから300藩あることにはなりますが、この段階で藩の数は264です。なお、改易を含めた藩の総数は、532藩となっています<sup>3</sup>。

- ・天保5年(1834)全国石高3,055万8,917石
- ・表3－藩高総計1,839万3,212石
- ・10万石以上49藩(18.56%)－石高合計1,217石1,725石(66.17%)
- ・10万石未満215藩(81.44%)－石高合計622万1,487石(33.83%)
- ・1万石～2万石 85藩 荻野山中藩
- ・2万石～3万石 42藩
- ・3万石～4万石 30藩 烏山藩

藩には、この他に、「国主(国持)」「城主」「無城(陣屋持)」といった家格の違いがあります<sup>4</sup>。「国主」は、1つの国あるいはそれに準ずる領地を持っている大名、「城主」は城を建てるのが許された大名、無城(陣屋持)は、陣屋を建てることのみが許された大名です。これらは石高とも対応していて、城主はだいたい3万石以上が目安で、それ以下は無城(陣屋持)になります。城と陣屋の違いは防衛施設の違いで、城

\*1 領地を持たない旗本もいた。

\*2 深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府 大名武鑑編年集成』

\*3 大石学編『近世藩制・藩校大事典』(吉川弘文館)

\*4 「准国主」と「城主格」という家格もあるが省略。

は石垣や堀などで曲輪くまわを隔てていますが、陣屋は土塁や板塀などで囲まれた簡素な施設になります。これとは別に飛地領の支配のために陣屋を建てることもあって、これを出張陣屋でばりじんやと言います。

それでは、具体的に荻野山中藩についてみていきましょう<sup>1</sup>。

### 【荻野山中藩】

相模国愛甲郡中荻野村に置かれた譜代大名で、相模國小田原藩11万3,000石の支藩。宝永3年(1706)小田原藩主大久保忠朝二男教寛たたとものりひろが西の丸若年寄に就任すると、駿河国で1万1,000石を与えられ、駿東郡松長(静岡県沼津市)に陣屋を設立。享保13年(1728)に相模国愛甲郡、大住郡、高座郡で5,000石を加増され、中荻野村でばりじんやに出張陣屋を置いた。天明3年(1783)5代教翹のりよしのとき中荻野陣屋を拡張改築して移り、以後、荻野山中藩と称した。

参考までに烏山藩についてもまとめておきます。

### 【烏山藩】

下野国烏山(栃木県那須烏山市)に居所を置いた譜代藩(前期は外様藩)。天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原攻めに際し、烏山城主であった那須資晴は参陣を怠ったため改易された。そのあとに一時、織田信雄が配流されていたが、翌年には武蔵忍(埼玉県行田市)から成田氏長なり たうじながが2万石で入封した。関ヶ原の戦い後加封され3万7,000石となったが、その後、継嗣をめぐる内紛から減封され、元和8年(1622)には泰之の急死とともに改易された。成田氏のあとは元和9年(1623)に松下重綱、寛永4年(1627)に堀親良ちかよしが入封。堀氏は親昌のとき、寛文12年(1672)信濃国飯田(長野県飯田市)へ転封となり、同年三河国中島(愛知県岡崎市中島町)から譜代の板倉重矩いたくらしげのりが5万石で入封、天和元年(1681)には武蔵国岩槻(埼玉県さいたま市岩槻区)へ転封した。かわって那須郡において1万2,000石を領有していた那須資弥なす すけみつが2万石で入封した。那須氏は家督継承の問題で貞享4年(1687)に改易され、あとへ永井直敬なが い ないひろが入封、元禄15年(1702)に上総国大多喜(千葉県大多喜町)から稲垣重富いながきしげとみが入封。享保10年(1725)には、近江国(滋賀県)から若年寄の大久保常春つねはるが2万石で入封。常春は、その後老中となり、相模国内(神奈川県)に1万石を加増されて3万石となった。相模国内の領地の支配のために厚木村でばりじんやに出張陣屋を置いた(厚木陣屋、厚木役所)。常春の3代前の当主大久保忠為は、小田原藩初代藩主大久保忠世ただよの弟。

荻野山中藩大久保氏は小田原藩大久保氏の分家一支藩、烏山藩は小田原藩大久保氏と親戚関係ということになります。ともに小田原藩大久保家の一門であることに違いはありません。相模国内にある藩は小田原藩と荻野山中藩だけですが、荻野山中藩の相模国内の領地は5,000石で、烏山藩の飛地は1万石ですから、図13(P.7)にあるように、厚木陣屋を中心に小藩があるようなものですね。それが厚木市近辺の特徴にもなっています。図8(P.4)は『相中留恩記略』という本に載っている荻野山中陣屋の図で、図9(P.4)ではこれを拡大してみました。また図10(P.5)は、陣屋の見取り図で、図11(P.6)では、この主要な建物を拡大してみたものです。藩主の居所であったと思われます。ついでに、図12(P.6)として、『相中留恩記略』から厚木村の図も載せておきました。右のページの下部、相模川沿いに「厚木陣屋」が描かれています。現在の厚木神社てんのうでお天王さんと呼ばれている「天王社」の隣ですね。現在は陣屋跡の碑が建てられています<sup>2</sup>。

## ・荻野山中藩陣屋焼き討ち

ここからは、表4(P.9～10)の略年表を中心に話を進めていきます。以下、むつらほんとして、表4一略年表の左につけている番号を示しておきます。幕末維新史は、近年、とくに研究の進んでいる分野で、そうした点も交えて話ができたらと思います。

\*1 荻野山中藩も烏山藩も『日本大百科全書』(小学館)を参考とした。

\*2 その他、神奈川県内でみても武蔵国金沢藩(六浦藩、横浜市金沢区)があるだけである。金沢藩は、下野国皆川(栃木県栃木市)を居所としていた米倉忠仰よねくらただすけ1万5,000石が、享保8年(1723)に武蔵国金沢に陣屋を移したことで成立した。

さて、幕末はいつから始まるかと言えば、通常は、嘉永6年(1853)のペリー来航と答えることになるか  
と思います。ただ、大磯町史などで史料を見ていきますと、東海道の宿場や近隣の村々では、文久元年(1  
861)の皇女和宮<sup>かずのみや</sup><sup>1</sup>の降嫁 1、もしくは翌2年(1862)、薩摩藩の島津久光が藩兵1,000人を率いて江  
戸に下り、幕府に改革を迫った一件 4以降、ことさら騒がしくなったと述べています<sup>2</sup>。文久期(18  
61~64)が大きな画期であったことは間違いのないようです。表4を見ても、文久2年(1862)には、帰国途  
中の島津久光一行が、生麦村(横浜市鶴見区)において、行列を横切ったイギリス人が殺傷される事件、い  
わゆる生麦事件が起きていますし 5、幕政の改革では西洋式軍制が正式に導入されます 4・6。

文久3年(1863)になると、徳川家茂が将軍として229年ぶりに上洛したことに始まって 7、5月10  
日には、家茂が朝廷に対して、この日を攘夷決行の日と回答したことにしたがって 8 長州藩がアメ  
リカ商船やフランスの軍艦などを攻撃します 9。7月には前年の生麦事件に対する報復として、薩英戦  
争が起きています 11。そして8月18日には、尊王攘夷激派の長州藩と同派を支持する公卿が、薩摩  
藩や会津藩によって京都から追放されるクーデター、文久三年八月十八日の政変が起こります 11。  
なお、従来、このクーデターは、尊王攘夷派の長州藩と公武合体派の薩摩藩・会津藩などとの対立と言わ  
れてきましたが、尊王攘夷は思想であり、公武合体は政策であることから、そもそも対立概念として考え  
ることがおかしいという意見が出てきています。尊王と攘夷もまた別の思想であって、攘夷派も開国派  
も尊王の思想に違いはないですし、長州藩が公武合体に反対しているわけでもないですから。

いずれにしても、長州藩としては京都政局における失地を挽回する必要に迫られるわけですが、その過  
程で起こったのが、新選組と会津藩兵らが、京都三条小橋の旅宿池田屋に止宿していた尊王攘夷激派の志  
士たちを襲撃した池田屋事件で 13、これに激怒した長州藩側が京都御所を攻撃する事件、禁門の変  
(蛤御門の変)が起こっています 14。この禁門の変も戦闘が御所だけに限らないことから、元治甲子戦争<sup>げんじかつしせんそう</sup>  
などとも呼ばれるようになっていきます<sup>3</sup>。これに対して7月23日には長州藩追討に対する勅令が出されま  
す 15。長州藩が朝敵となった訳で、これが第1次長州征伐です。もっとも長州藩では、この後、8月  
にはイギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国艦隊による砲撃を受けたこともあって 16、幕  
府に対して降伏します 18。とは言え、長州藩は、結局、降伏の条件を反故にし、高杉晋作らを中心  
とする幕府に対抗する派が、俗論党と呼ばれる藩内の守旧派を破って権力を握ります。これまではここで  
討幕派が形成されたと言われていましたが、近年の研究では、この段階ではまだ倒幕の意志は示してい  
ないとして、「抗幕<sup>こうぼく</sup>」という語が使われるようになっていきます<sup>4</sup>。こうした動向に対して幕府は、長州藩再征  
討の意志を固め、慶応元年(1865)9月21日付で、長州再征討の勅書を受けます 19。第2次長州征伐  
です。第2次長州征伐では、将軍家茂が実際に進発して大坂城に在陣します。ぼう大な数の兵が西へ向か  
う状況の中、東海道の宿場や近隣の村々は過大な負担に悲鳴を上げることになります<sup>5</sup>。

しかしながら、翌慶応2年(1866)1月21日には、薩長同盟が結ばれ 20、薩摩藩は出兵を拒否しま  
す 21。薩長同盟も最近の研究では、坂本龍馬が主導したわけではなく、薩摩藩の小松帯刀<sup>こまつたてわき</sup>と長州藩  
の木戸孝允<sup>きどたかよし</sup>が中心となって結ばれたことが明らかになっていますが、詳しくは省略します<sup>6</sup>。ここでは、  
薩長が盟約を結ぶことで、抗幕から次第に倒幕への流れができてきたことを確認しておきましょう。幕府  
軍と長州軍は、6月7日の周防大島での砲撃をはじめとして戦闘に入ります 22。ところが、幕府軍の  
戦況が不利になった上に、翌7月20日に家茂が大坂城で急死したこと 23などが重なって、9月2日

\*1 仁孝天皇の第8皇女で、時の天皇孝明天皇の妹。親子内親王。有栖川宮熾仁親王と婚約していたが、  
公武合体のためにこれを破棄して、14代将軍家茂に降嫁。結婚は、翌文久2年(1862)。家茂没後は静  
寛院宮と称した。

\*2 『大磯町史』7 通史編 近現代 第1章第2節 幕末の騒乱と街道負担の増大(2008年)

\*3 中村武生「元治甲子戦争における新選組の軍事行動」『軍事史学』第54巻第3号(2018年)

\*4 三宅紹宣『幕長戦争』吉川弘文館(2013年)。近年では、長州征伐や長州征討といった幕府側からのみ  
見た立場ではなく、両者を対等に見た「幕長戦争」といった用語が一般化しています。

\*5 『大磯町史』7 通史編 近現代 第1章第2節 幕末の騒乱と街道負担の増大(2008年)

\*6 町田明弘『薩長同盟論—幕末史の再構築—』人文書院(2018年)

には安芸の宮島で休戦協定が結ばれます 24。こうした中、12月5日に一橋慶喜が將軍宣下を受け 25、慶応3年(1867)5月には、幕政の改革にも着手しますが 28、倒幕への流れが大きくなる中で慶喜は、10月14日、起死回生を狙って大政を朝廷に返上するという賭けに出ます 29。同日には、討幕の密勅が下されたと言われていますが 30、これにも最近疑義が出されています<sup>1</sup>。大政を奉還したとは言え、新体制の中でも慶喜は主導権を握っていく腹づもりでしたから、倒幕への流れはさらに大きくなっていったのでした。

文久期以来の流れを大急ぎで見てきました。ここからが本題です<sup>2</sup>。実は慶喜が大政を奉還する前から、幕府の対処をめぐっては、幕府の体制を温存しながら新たな政治体制を築いていこうとする土佐藩や親藩・譜代藩と、武力倒幕をめざす薩摩藩・長州藩などの2派がしのぎを削っていました。武力討伐をめざす薩摩藩の西郷吉之助(隆盛)に大久保一蔵(利通)らと急進派の公卿岩倉具視らは、その口実を作るために江戸・関東を攪乱して幕府を徴発しようと謀ります。その首謀者の浪士として江戸に送り込まれたのが、小島四郎、後に赤報隊を結成し、偽官軍として処刑される相楽総三です。慶応3年(1867)10月、小島は、薩摩藩士の益満休之助・井牟田尚平らと江戸の薩摩藩邸を拠点に関東の攪乱工作を開始します 31。まずは薩摩藩邸において、天璋院(13代將軍家定夫人、篤子)警護の名目で各地の浪士を集め、浪士隊を結成し 32、11月にはその人数も幹部16人、浪士約500人に膨れ上がります 34。薩摩藩邸の浪士隊幹部は、具体的な関東攪乱工作を検討し、江戸中心とする3地点で挙兵する計画をたてます。それが以下の3隊です 35。

下野国都賀郡出流山(栃木県南部)で挙兵し、東北地方から江戸へ出る道を分断—野州隊(隊長・竹内啓)

甲斐国甲府城(山梨県甲府市)を攻略し、中部地方から江戸へ出る道を分断—甲州隊(隊長・上田修理)

相模国愛甲郡の荻野山中陣屋を襲撃して東海道を制圧し、幕府を牽制—相州隊(隊長・鯉淵四郎)

荻野山中藩を焼き討ちしたのは、このうちの相州隊でした。以下、焼き討ちの状況については、具体的に史料を読んでみることにしましょう。何れも原文は漢文ですが、書き下し文に改めています。まずは、荻野山中藩主大久保教義による幕府への報告書です。表4では 14・15 で、この行程を図示したのが図14(P.8)です。

### 【史料1】<sup>3</sup>

去る十六日先ず御届け申し上げ候。私領分相州荻野山中陣屋え同十五日夜六時頃浪人跡の者五、六拾人程不意に押し寄せ、炮発致し候に付き、夫々手配仕り候内、炮火にて武器蔵を始め、長屋向き一時に燃え上り、表門焼失仕り、多人数打ち入り候間、直ちに手合い仕り候得共、俄の儀、殊に夜中強雨にて行き届き難く、別紙の通り手負い等も御座候間、猶再手配仕り候内退去申し候。尤も浪人共の内手負い、両、三人程もこれ有り、駕籠にて退去、猶領地近辺徘徊致し候に付き、追々人数差し出し候処、当時何地え潜伏仕り居り候哉、駈と相分り難く、手負い打死並びに分捕りの品、別紙の通り陣屋詰め役人共より申し越し候間、此段御届け申し上げ候。以上。

十二月廿九日

(荻野山中藩主 教義)  
大久保出雲守

続いて、武蔵国多摩郡小野路村(東京都町田市)の(小島)鹿之助らが、鹿之助の息子で小野路村の名主を勤めていた増吉らに宛てた書簡です。なお、小島鹿之助は、天然理心流の道場を開いており、新選組の近藤勇や土方歳三、沖田総司らと親しい関係にあります。

\*1 青山忠正「慶応三年十二月九日の政変」明治維新史学会編『講座 明治維新2』有志舎(2011年)

\*2 ここからの記述は、『小田原市史』通史編 近世 第12章第2節 領内の動揺と戊辰箱根戦争を参照のこと。

\*3 『厚木市史』近世資料編(5) 村落3 荻野山中藩 史料 1383



【史料2】<sup>1)</sup>

御用便を以て申し上げ候。然らば当十四日浪士<sup>しか</sup>体の者<sup>てい</sup>三十<sup>てい</sup>壱人長刀・槍・銃<sup>てつぽう</sup>炮を持ち、相州鶴間村<sup>(大和市)</sup>山本え剛<sup>ごうじょう</sup>情に止宿いたし、翌月馬十五疋<sup>ひき</sup>触れ当て、厚木町<sup>まか</sup>え籠り<sup>こ</sup>越し、夕七ツ半<sup>(午後5時頃)</sup>時頃荻野山中の陣屋<sup>ちぢや</sup>を焼き討ち、武器類残らず奪い取り、翌十六日より最寄り富家へ剛談、且つ書面を以て出金<sup>だつりやくきん</sup>申し付け、奪掠<sup>だつりやく</sup>金左に

一金八百両	(厚木市) 川入村大惣代	市右衛門
一金八百両	(座間市) 栗原村	弥一
一金四百両	(厚木市) 山際村	才二郎
一金百両	同村 名主	弥右衛門
一金五百両	(厚木市) 妻田村	空左衛門
一金百五拾両	(愛川町) 熊坂村 名主	半兵衛
一金百七十五両	(相模原市緑区津久井町) 築井下平井村	惣右衛門
一金三百五拾両	(相模原市緑区城山町) 上川尻村中	

右の通り奪い取り、十七日小比企村<sup>(八王子市)</sup>にて昼食、九ツ時頃八王子宿<sup>だばおびた</sup>え出、長持ち三棹・駄馬<sup>だばおびた</sup> 夥しく、人足六十人余相雇い、宿々継ぎ立<sup>(江戸のこと)</sup>てを以て御府内<sup>まか</sup>え籠り<sup>まか</sup>帰り、尤も高井戸<sup>(東京都杉並区)</sup>にて千人同心<sup>(八王子千人同心)</sup>討ち手の内四人飛ぶ如く跡追<sup>といや</sup>い駆け、浪人跡に後れ問屋場<sup>といや</sup>にて賃銭相払い候<sup>ば</sup>処を生け捕り、八王子宿<sup>(八王子市)</sup>え引き戻し申し候。一手は八王子宿<sup>(八王子市)</sup>止宿の節、十五日夜同宿・駒木野農兵<sup>(日野市)</sup>取り固め、浪士三人打ち取り、式人生け捕り<sup>このて</sup>、此手え入り組みの処、跡遁<sup>に</sup>げ去り申し候。尤も日野宿<sup>(日野市)</sup>農兵<sup>さ</sup>壱人即死、道案内兼助儀<sup>ふかて</sup>も深手にて昨日相果て申し候。

右始末、実に以て前代未聞、私共儀も四昼夜寝<sup>ほんそう</sup>ずに奔走心<sup>ほんそう</sup>労、漸く昨夜より少々安心<sup>ようや</sup>仕り、右始末<sup>こさい</sup>巨細は中々書き取り難く、只大抵の御含<sup>ただたいてい</sup>み迄申し上げ候。早々、以上。

十二月十九日

鹿之助  
利平司  
道助  
又二郎

増 吉様  
藤右衛門様  
貞 助様

右は薩州賊相州辺迄暴行いたし候始末、<sup>(町田市)</sup>小野路村より申送り候。

(後略)

慶応3年(1867)12月14日、江戸を出立した相州隊は、矢倉沢往還(現・国道246号線)沿いの下鶴間村(大和市)に1泊すると、翌15日に厚木村に入り、近隣の村々から人馬の提供と、金銭の供出を強要します<sup>39</sup>。【史料2】にある栗原村(座間市)の弥一(大矢弥市)は、「相模の弥市」に「栗原御大尽」と呼ばれ、「関東にて二、三番通りの物持ち」と呼ばれた豪農です<sup>2)</sup>。また、妻田村の空左衛門は、国道246号線にあるドンキホーテの裏通りにある黒堀の家、長野家のことですね。相州隊はこうした豪農、豪商たちから金銭を供出させたわけです。

そして厚木村に止宿していた相州隊は、翌15日の午後10時頃<sup>3)</sup>、折からの暴風の中を下荻野村に到着すると、ただちに荻野山中藩陣屋を襲撃し、奉行役に重傷を負わせ、中間1人と足軽1人を殺害すると、陣屋にあって武器や弾薬、米などを持ち去り、建物を焼き払います<sup>40</sup>。この時、烏山藩の厚木役所も

\*1 『厚木市史』近世資料編(5) 村落3 荻野山中藩 史料 1393

\*2 神奈川近世史研究会 『神江戸時代奈川の100人』有隣堂(2007年)

\*3 焼き打ちの時間については史料によっていくらか違いがある。ここでは一応 『小田原市史』通史編 近世の記述にしたがった。

別働隊によって焼き討ちされています。これはたいへん重要なことではないかと思えます。荻野山中藩と烏山藩が小田原藩大久保氏の一門であることは、先に述べたとおりです。それだけに、翌16日、小田原藩が甲 冑・手槍その他大砲・小砲、大 銃2挺を引きながら、藩兵200人を出動させたのが注目されます 42。また、伊豆国韮山(静岡県伊豆の国市韮山)代官の江川英武にも浪士隊残党の探索が命じられています 47。【史料2】によると、駒木野農兵(東京都八王子市)と日野宿農兵(東京都日野市)が出動し、実際に浪士を打ち取ったり、生け捕りにしたことが報告されています。駒木野農兵も日野宿農兵も江川代官が組織した江川代官所支配下の農兵隊です。なお、相州隊は、16日に根小屋村(相模原市緑区)に1泊すると、八王子宿・府中宿を経て18日に内藤新宿(東京都新宿区)に到着します 45・46。その間にも相州隊の追討は続いていたわけで、小田原藩兵は、28日迄矢倉沢往還沿いに相州隊残党の追跡を行っています 51

以上が荻野山中藩陣屋焼き討ちの経過です。浪士隊3隊の内、野州隊と甲州隊は目的を達成しないままに鎮圧されます。その意味では、相州隊のみが一応でも目的を達成することができたのでした。

## ・結びにかえて

しかしながら、話はここで終わりません。手短にお話ししますが、その後、旧幕府軍は、報復手段として、12月25日に江戸の薩摩藩邸を襲撃して焼き討ちします 50。浪士隊3隊の活動以外にも江戸では薩摩藩による攪乱動作戦が続いていました。12月22日には出羽国庄内藩(山形県鶴岡市)酒井家の江戸屯所に鉄砲が撃ち込まれます 48。23日にも別の庄内藩屯所に鉄砲が撃ち込まれ、江戸城二ノ丸が焼失します 49。二ノ丸焼失は、薩摩藩の放火とも言われています。庄内藩が狙われたのは、江戸の警備を中心となって担っていたからと思われれます。話は溯りますが、文久3年(1863)に将軍が上洛した際に、250余名の浪士が付き従っています。その後、この浪士たちは、生麦事件の報復として横浜沖にイギリス艦隊が集結して開戦の危機あるということから、江戸への帰参を命じられます。この時に京都に残った浪士50余名が中心になって新選組を結成し、会津藩の「お預かり」となります。江戸に戻った200余名は、庄内藩に「委任」されて「新 徴 組」となります。江戸警備の中でも庄内藩は特別の位置にあったわけで、新選組と新徴組は幕末が生み出した、言わば双子の浪士隊といえるでしょう。歴史はまさにあざなえる縄のようなものです。

明けて慶応4年(1868)1月3日、鳥羽・伏見の戦いをきっかけとして戊辰戦争が始まります 71。その一環として、東海道では唯一、箱根で戦闘が起きます。これは新政府軍の長州藩と岡山藩が背後を見守る中で、旧幕府軍の遊撃隊と小田原藩兵が闘ったもので、もっとも大きな戦いは5月26日に箱根の山崎で起きました 79。これを箱根山崎の戦いと言い、この全体を戊辰箱根戦争と呼んでいます。荻野山中藩陣屋焼き討ち事件は、ここまで繋がっています。

だからこの事件は、大きく言えば、倒幕への導火線に火をつけ、近くは戊辰箱根戦争へと繋がる一大事件だったと言うことです。それだけに荻野地区にとっては、幕末維新史の重要な局面として語りついでいかなければならない出来事ではないでしょうか。

ここで改めてなぜ荻野山中藩が狙われたのか?と問いかければ、第一義的には、先に述べたように、江戸から相模国にいたる支配の構造によるものでしょう。東海道そのものを封鎖しようとする、小田原藩と直接対峙しなければならない。そこで絶好の標的であったのが、荻野山中藩陣屋で、それは烏山藩厚木役所が同時に焼き討ちにあったという事実からも推測できます。荻野山中藩陣屋は甲州道の要路でしたし、烏山藩厚木役所(陣屋)は、矢倉沢往還などの要路にあたっていました。

今回の講演会では、荻野山中藩陣屋焼き討ちを取り上げましたが、事件だけを取り上げるのではなく、その前提となる江戸時代の現在の研究状況からはじめて、荻野地区の歴史的特徴、さらには藩と何かといったことから話を繋いでいきました。幕末史については、最近の研究状況についても触れてみました。それだけ話が複雑になりましたから、分かりにくい部分も多かったかと思えます。そのためにレジュメを文

章形式にしてみました。ただ、はじめにでも述べましたように、こうした複雑さ、絡み合う糸が歴史のおもしろさであり、奥深さであると思っています。今日の話は、そのままでは教科書とは異なる点多々あるかと思います。歴史はできあがったものではなく、研究の深化によって、常に更新されていくものであるということも理解していただければと思います。それ以上に、荻野地区の、厚木市のローカルヒストリーの意義について、いくらかでも心に引っかかるものがあつたら、それこそ幸いかと存じます。

ご清聴ありがとうございました。